

## 編集室から

桜が散ると、能登半島の七尾の街は徐々に祭りモードになります。由来に拠ると千年の歴史があり、国の重要無形民俗文化財に指定され、ユネスコの無形文化遺産に登録されている青柏祭（せいはいくさい）において最大の呼び物となるでか山（曳山）の組立て準備に入るからです。

でか山は、その大きさが日本一で、中心街の三町から人々によって曳かれ、5月4日に山王神社に集結します。最も早く動き出す府中町の山は、朝山と呼ばれ3日の深夜から始まります。伝統祭礼には珍しく、一般の方が山を曳くことができるので人気があり、三本の曳き綱はいつも鈴なりの人になります。

三つの山には歌舞伎の一こまを表す飾りつけがなされますが、余りにも大きい曳山の上なので、良く見えません。このため前日2日の夜に、慶事などがあった市内三町の三箇所のお宅（人形宿と呼ばれます）で人形見と呼ばれる行事があります。一つの山ごとに歌舞伎役者に見立てられた三体の人形が飾られるので、前夜に一体一体がお披露目されているのです。

今月の表紙写真は、昨年の人形宿の一軒です。人形宿では、一夜限りの庭を設え、三宝に供物、生け花での盛りたてが基本で、中には一斗樽を並べて見物人に酒を振る舞う処もあり、聞くところに拠ると一晩で百万円単位の出費をすることもあるとか。この大きな負担のため、近年は人形宿の引受けが難渋するそうで、簡略化されたり公的施設での開催となりつつあります。

それでも、旧市街地の各地に点在する人形宿を探して、振る舞い酒にほろ酔いで夕闇迫る中、お囃子の音や人々のそぞろ歩きに誘われて、訪ね歩くのも風情があります。

青柏祭は元来5月中旬でしたが、曳き手や巡航管理の人々の確保のため、黄金週間に早められて以降、広く全国に知られるようになり、人手確保も解消しています。この期間は、宿泊手配が難しいので、友人を頼りにしてお越し下さい。（は）



Chintara

日本酒バルChintara  
03-6427-8183  
17:00～24:00  
金曜17:00～28:00日曜祝休  
渋谷区道玄坂2-19-3  
ライオンズマンション道玄坂1階

本ニュースにレギュラー執筆  
していただいている川島さん  
が「能登の夜市」の姉妹店を  
開店されました。  
上京された際、ご利用になっ  
てみてください。  
もちろん、川島さんご自身も  
お店に立っておられます。

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2017/05  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167  
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217  
Fax 076-233-7375  
Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2017/05  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

## 泉 月



青柏祭の人形見  
石川県七尾市にて  
by hama

本論を始める前に、まず言い訳のような前置きをします。これから医学に関する話を始めるわけですが、心して、腰をしっかりと据えて、覚悟して読み進めてください。話は難しいし、歯切れも悪いです。何故なら、医学とその基本になる生物学とは、きわめて複雑で、いまだ全容解明には程遠い状態だからです。生物学はすべて、化学反応と物理現象から成り立っています。化学と物理は、誰が何回やっても必ず結果は同じになるのですが、生物学はその化学と物理があまりにも複雑に絡み合っているため、たとえば同じ病名の同じような症状の人に同じ薬を投与しても、効く人と効かない人と副作用の出る人が必ず出て来てしまいます。現代医学の粹を凝らし、たとえば病原菌を厳密に特定して抗生剤の感受性を確認し、CTで病変部位を確定して血液検査で炎症の程度を把握したうえで治療を行ったとしても、結果はたいして変わりません。比較的単純な感染症ですらそうですから、生活習慣病のような代謝性疾患とよばれる病気は、もっともっと複雑です。まあ逆に言えば、難解だからこそ、トマトジュースが良いとか、オリブオイルが効くとか、糖質制限食をすれば全て解決するとか、マスコミに取り上げられるネタが次から次へと湧いて出てくるわけです。

正確に書くこととすれば、教科書のように面白くない文章になってしまいます。でも世に溢れている薄っぺらい短絡的な内容にもしたくありません。できる限り根拠に基づきながら、私なりの重み付けをして、説得力がありながらも判りやすい、を目指してらさず……」

「徒然草」、「枕草子」とあわせ日本三大随筆と称される鴨長明の「方丈記」冒頭である。

長明は、下鴨神社の神主の家系に生まれ歌人としても名を馳せ、勅撰和歌集に二十五首入集している。一方で、跡目争いに敗れて要職に就けず、小庵に隠棲した。

### 瀆のつばやき 『一滴水』

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず……」

時に岩をも運ぶ「大河の流れ」に対して、「一滴の水」は、余りにも小さ過ぎて無力だ。しかし、その一滴が無ければ、大河にはなれない。

たとえ自らの存在・力は小さく、はかなく無力に思えても「一滴」としての役割をコツコツと果たし続けたい。往けば、やがては大河の源流ともなる。つ。東日本大震災、熊本大震災……。これらの大災害による被災の状況を見たとき、そのように思った。

大言し大いに夢を語れば、訳知り人からは「なにを一滴水に過ぎぬものが」と失笑される。しかし、どんな大事もすべて足元の小さな一歩から始まっている。

いきますと大見得を切つて、自分にプレッシャーをかけることにします。そして更にプレッシャーをもう一つ、今回から題名に「社会」を加えることにしました。云つまでもなく、「上医は国をいやし、中医は人をいやし、下医は病をいやす」を意識しています。もちろん私は政治家でも環境学者でもありませんが、私なりに生活習慣病予防に向けて結果を出せるような提言をお示しすること、社会の役に立ちたいという思いでいます。

今回は、ここで区切らせていただきます。多めに空いたスペースには、閉寮を機に三十年の世代を超えて集った仲間たちの写真をお願いしました。



【プロフィール】  
（いがき としお）金沢大学北  
浜寮で、瀆さんの2年後輩で  
した。瀆さんは、とつても怖  
かった……。卒業後は金沢を離  
れ、現在は温暖な讃岐高松で  
又ク又クしています。



事に臨むとき、「謗りを受ける覚悟ができてるか」と己を省みる場合がある。しかし、これでは既に謗りに対して同等になっている。世に無いことを為そうするのであれば、謗りは当然、それが世の常・人の常だと知れば、それもまた織り込み済みとなる。受けた謗りに「ご尤もです」と頷く以外に何も要らぬ。

芸術家・岡本太郎は「人の評価を意識したものは芸術ではない」と断言したという。失意に呉れて隠遁した長明も、よもや人の評価を意識して方丈記を記したわけではなからう。世の評価を受けること叶わなかった長明はしかし、方丈記を遺した。そして後、我が国を代表する文学作品であると評価され、その研究に生涯を捧げる学者が現れようとは夢にも思わなかったかも知れない。

この一滴が、いつの世で「大河の一滴」となるか、あるいは単なる一滴として消えて往くのか、一滴のときには判らない。誰として理解されなくとも己が確信した道であれば、淡々と歩んでいくにしくは無い。

「淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」と、彼の記は続いている。

うちの竹やぶの中に生えている大樹を材木屋に見てもらった。

「これはケヤキではないね」

ということで、その人はとっとと帰っていった。引き止められないうちに逃げるように。狙われていた北側の大きな樹木は、太さや形は十分のようだがケヤキではなく、小さい方の南側の樹木はケヤキだが太さが足りず、いずれもお眼鏡に合わなかったようだ。もしかすると望外の値がつくかもと期待していたのだが、取らぬ狸の皮算用だった。

この話が持ちかけられてから約2ヶ月。眠っていた山々が笑い出す季節となり、我が家のケヤキもどきもスケルトンのシルエットから青々とした新芽が吹き出した。竹やぶからはタケノコが頭を出し、裏年で収穫はやや少ないものの、毎朝が忙しい時期を迎えている。ツバキは赤い花をボタッと落とし、それと入れ替わるようにドウダンツツジの白い花がたわわにつく。ウグイスも鳴き始めたが、まだまだ練習中のその声は実に初々しい。

季節は必ず巡ってくる。北陸の長く暗い冬を経て、今はそれから解き放たれたかのような開放感に満ち溢れている。人間どもの喧騒には、我関せず見向きもしない。金勘定をしていた自分が恥ずかしくなる。

木材としての経済的価値が伐採に要する諸費用を大きく下回ったため、その木は生き長らえることとなった。ケヤキはケヤキもどきとなったが、そんな名前とか人間から見た利用価値とは関係なく、ずっとそこに存するのみ。新緑、紅葉、落葉、そして、周辺へと種子を飛ばすことを、毎年繰り返す。そのうちのいくつかはやがて生を得るが、大きくなる前に家主に見つかり刈られる。

公園整備の費用対効果を算出する際などに、緑地の価値を貨幣換算することがある。単純化して言えば、二酸化炭素の吸収などの環境効果や、火災延焼を抑える防災効果などを、別の人為的な対策にかかる費用をもってその価値とするような計算になる。また、建物や道路等を建設するとき、元々その土地にあった樹木を伐採することがあるが、それは施設整備による便益の前に、樹木の経済的価値が霞むからに他ならない。

確かに、植物に限らず複雑で多様な価値を持つものに対して、人間がなんらかの評価をしなければならぬ場合、一つの尺度、すなわち貨幣換算によって行わざるを得ない。ところが、景観とか生態系に係る評価や、それに近い人間の思い出・思い出入れなどをお金に換えることは困難を極める。

社会基盤整備に関するマニュアルに基づき、これらの視点を無視し一部の価値をひたすら計算していた時期があった。それに換わる評価手法を思いつかないが、少しだけ立ち止まって考えることが大事なのかもしれないと、今は思う。

4月22日(土) 小雨の降る中、横浜で行われた前職の元部下の結婚式に行ってまいりました。旦那が元部下で年は40歳、奥さまは33歳の大人のカップルでした。ちなみに二人とも初婚です。ご時世を反映してか、会に出席している友人男性、友人女性の多くが未婚でした。ちなみに今回は晩婚化をテーマとしている訳ではありません。『結婚式のシステム』についてふと思うことがありました。

市場背景としては

少子化・晩婚化・未婚者の増加で縮む市場規模 リピーターというのが存在しにくい

自分達仕様、脱お仕着せ・『なし婚の増加』という消費者ニーズ

式場や設備等への投資が相当かかる 週末偏重型の事業

最上のおもてなしを提供することをミッションとしているため人件費比率も高い

ということが事実および推測として考えられます。つまり、とても将来的に大きな成長は期待できない産業と捉えてもいいかもしれません。

にも関わらず、ここ数年で市場参入する企業が増えているのです。かつ市場規模も3兆円超と国内のビール市場とほぼ同規模なのです。この市場規模には、直接的な式場事業の他には

結婚関連事業：指輪/ドレス/エステ・美容/旅行

新生活準備事業：新居/家具/家電/各種保険/出産・育児

も含まれており、この周辺事業が伸びているようです。また新規参入企業にとっても既存の本業(紳士服等のアパレル/レストラン業態)とのシナジーを生み出すために市場参入している企業が多いようです。確かに、結婚式は一世一代のイベントですので

購買単価が高い。または質の高いサービスを求めるケースが多いので高い収益率を期待できる。

ご祝儀で回収という概念があるため購買側も高額な商品を購入した感覚が乏しい

専門性の高いサービスなため、顧客はプランナーに依存しがちとなり、コントロールしやすい。

というビジネス上のメリットがあるのでしょう。

ただ、私がこの土曜日に参列した感想を言えば

**しきたり・慣習と現代の価値観とのギャップ**

いまだご祝儀というスタイル自体が今後必要性を問われてくると思われまふ。可処分所得が低減傾向にある20~30歳代前半にとって3万円という出費は非常に厳しいものであります。また、晩婚化や未婚者の増加によって、回収できず割を食うリスクがあるということも現代人は知っています。そのような環境変化と従来の結婚式の慣例に大きなギャップが出てきたと感じます。このご祝儀というスタイルがなくなったらどうでしょうか？ 数百万円もかけてきれいな式場で100人以上も呼んでという結婚式を求めませんか？ 恐らく既存の結婚式ビジネスは壊滅となるでしょう。

**参列者満足を意識しない運営**

事業者にとってのお客様は結婚される2人なわけですが、しかし、この費用を支払っているのは私たち参列者なのですが、『あーこれ参列者満足を全く考えてないな』ということです。

(1)お料理の品質レベル

例えば、3万円のご祝儀の内1万円分を食事代と捉えたとします。弊社店舗では1万円ですと北陸の新鮮な食材と日本酒を堪能してもお釣りがきます。よく式場の食材原価率は15%と聞きます。それでは今の消費者の舌を満足させることは難しいでしょう。「お酒飲ませておけばいいや」という感じがピンピン伝わってきます。

(2)純粋に祝うのではなく、演出として無理やり参加させるオペレーション

こちらは静に微笑んで大人な二人を祝福したいにも関わらず、式の運営者による「二人を知らない司会者が語るお涙頂戴エピソード」「ここでおめでとくと大声でいってください」「幸せになりたい女性の方お集まりください」(これ問題ですよね。「不幸な人集まってください」と同義です)

多くの私たちが参列者を使ったお仕着せの演出にげんなりしました。心から祝いたいのに、どこか興ざめた感じになってしまった土曜でした。

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』ドバイへの旅 2016.12.23~28  
静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

さて、旅に話を戻そう。ドバイ博物館の拝観の次は本ツアーで最も気に入ったアブラという渡し船、いわゆる海上タクシーだ。クリークで分断されたパールバイとディラ地区を結んでいる。他のお客と乗り合わせることなく3人でスタート、何隻もの船が往来している。渡った先は古い街、中を歩くにはガイドがいないと迷子になりそうだ。スパイス、布地、中国産の服、土産物売る店がところ狭しと立ち並ぶ。掛けられる言葉はニーハオ。次にこんにちは。とにかく中国客は今世界中どこでも多い。次は金製品特にアクセサリーのお店が立ち並ぶ、世界一大きな金の指輪もあった。



ここから、この日最後の目的地のドバイモールに車で移動。世界最大のショッピングモールで、店舗は合計1,200店舗が入居。ほかに水族館やアイススケートリンク、ウォーターフロントアトリウム、22のスクリーンを持つ映画館がある。この日の17時から世界一高い建物ブルジュ・ハリファの展望「アット・ザ・トップ・スカイ」を予約してあったので、まずはそこでチケット入手のお手伝いをガイドにいただいた。多くの人が受付に溢れていて、どこで入手するかがわからなかったが、ガイドのおかげで無事にチケット入手。

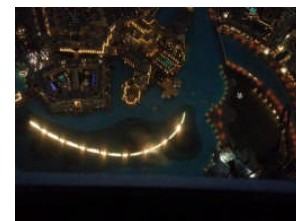
ドバイで最も楽しみにしていたブルジュ・ハリファの展望だ。尖塔高828m、建築高636m206階建て。地上442m、124、125階に屋外展望台「アット・ザ・トップ」があり、さらに上の地上555m、148階に「アット・ザ・トップスカイ」がある。ちなみにスカイツリーの展望回廊の高さは450m入場料は3600円。

ブルジュ・ハリファにはアルマーニのホテルとレストラン、オフィス、マンションが入っている。展望台には事前オンライン予約が当日券よりも安く入手できるとのこと、日本で予約、せっかくだから高い方へ。一人一万円程、124-125階の展望台「アット・ザ・トップ」倍以上だ。その代わりに人数限定待ち合い



の部屋が用意されアルビックコーヒーとデザートのもてなし付き、148階に着けばウェルカムドリンクも待っている。

17時受付を狙った。夕暮れ近いが昼と夜景のふたつが楽しめること、そして18時の大噴水ショーのドバイ・ファウンテンを上から見てみたかったからだ。ブルジュ・ハリファのエントランスは人でごった返していた。2つの展望台のトップとスカイトップは入り口が途中で分けられる。上昇スピード時速36キロで程なく到着、手前には高層ビルが、そのすぐ先には砂漠が、真下を見るときはるか下にドバイモールが見える。砂漠の砂が飛んでくること、雨が無いことからガラスの高層ビルは汚れがちだ。ブルジュ・ハリファは綺麗な方だが、ガラスを介しての風景にモヤモヤする。そこでオープンエアーの展望台に出ると直に外が見え、おーと感嘆の声が漏れる。太陽が沈み始めると、建物、ハイウェイ灯の光が目立ってくる。背後に暗い砂漠が広がるから、余計にその灯りが際立つ。その内に長さ275m、150mの高さに上がる噴水ショーが始まった。噴水を見下げる経験は初めてだ。かなり面白い!!



ブルジュ・ハリファ建設は、石油依存の単独経済からサービスや観光を含む多様化を目指す表れた。都市が国際的な認知を得て投資を呼び込むには、何か凄くセンセーショナルなものをというのである。設計はシカゴのスキッドモア・オーウィングズ・アンド・メリル、建設は、韓国のサムソン物産が担当した。建設は2004年9月21日に始まり、2009年10月1日に完成している。

ドバイ3日目は、現地ツアーで最も人気の高いデザートサファリに申し込んだ。食後のデザートじゃなくて砂漠のデザートへのツアーだ。1人一万円程。これも予定時刻より40分ほど前にお迎え登場、今日のドライバーはフィリピン人だ。これら砂漠を走ることもあって車はトヨタランドクルーザーだ。次のホテルに寄り、これまたフィリピンの五人家族をピックアップした。高速道路を一路砂漠に向けて出発、人が開発した都市を過ぎれば、もう砂漠地帯だ。途中、トイレ休憩にドライブインに寄る。駐車している車は殆どトヨタランドクルーザー、皆砂漠のツアー参加者だ。(つづく)

